
SUGAR BREAK

台風X号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SUGAR BREAK

【コード】

N3516N

【作者名】

台風X号

【あらすじ】

短くて楽しい作品。でもゴキブリ君と蛙君は・・・変な世界で変なトラブルにウンザリしていく。

砂糖壊し(前書き)

新しいコメディの始まり。

砂糖壊し

主題歌OPテーマ break!break!sugar

1匹の蛙君とゴキブリの台所超馬鹿幻想物語。

SUGAR BREAK

「ゴキブリ君、どこにいるの？」

「此処だぜ、俺は。」

「なんで、そんなところに？」

「良いから来いよ、人間にはれないうちに。」

「うん、分かった。」

そこは、砂糖を入れる場所だった。

その場所に蛙君とゴキブリ君が入った。

その瓶から光が出て、2匹は奇妙な世界に送られた。

「此処は一体どこなんだ？」

「分からないけど、見るからに現実の世界じゃないね。」

ゴキブリ君の言うとおりである。此処は、メルヘンチックな世界で

ある。

此処で一体何が起こるのだろうか？

主題歌EDテーマ 蠢き彷徨う

砂糖壊し(後書き)

次回 馬鹿者。お楽しみに

馬鹿者（前書き）

この世界の正体とは、そしていきなりトラブル発生！

馬鹿者

メルヘンチックと思いきや、実は砂糖を使ってアイディアを生み出さないときちんとした世界にならないというこの場所。

蛙君とゴキブリは、あることを考えていた。

それが砂糖になり、形を変え始めた。

「考えただけで、こんな大きなタワーができるのかよ。」

「俺とお前だから、俺は300メートル級のタワーを考えていたよ。君は？」

「僕は、250m級だけど。」

「合計で550メートルだ！」

彼等は、そのタワーを上った。

エレベーターと階段があった。

しかし、エレベーターは、一人しか乗れない。

「俺が乗るから、お前は階段上がってくれ。」

「嫌だね、僕が乗るんだ！」

「たくつしょうがない奴だな。」

ゴキブリは、階段を上がった。

「蛙の野郎、筋肉が弱すぎるんだよ。」

文句を言いながら、大展望に來た。

蛙君はゴキブリにこう言った。

「この世界は、二人で作っていきつもぬけ蛻の殻の世界じゃつまらないだろ！」

「そうだね、つまらないね。」

ゴキブリは、待ち針を考えた。

砂糖が待ち針に変化した。

「これをここから落としてみよう。」

「人が通るかもしれないから、やめたほうが……」

「ごめん、手が滑っちゃった。」

その待ち針は、シロアリの頭に刺さった。

「誰だ……針を……」

蛙君とゴキブリは見なかったことにした。

馬鹿者（後書き）

次回 おはようギリギリス君。お楽しみに

おはようキリギリス君（前書き）

2か月ぶりの更新orangeていつかなぜスランプになっていたかわかりますよね？他の作品の構造に行ってしまったせいです。

おはようキリギリス君

ゴキブリと蛙の奇妙な幻想物語。

ゴキブリは、朝起きて顔を奇麗にしていた。

「ゴキブリでも、毎日清潔にしているんだ。だって美容と健康のためだね。」

蛙君は、朝の運動を楽しんでいた。

その時、キリギリスと出会った。

「おはようキリギリス君。」

すると突然、キリギリスは、中指を立てた。

「何だよ！いきなりあんなことするなんて。」

キリギリスは、略して言うことが嫌いである。

そんなことを気にしていない蛙君が一番悪いが本人はそのことを知らないのである。

「おはようございますキリギリス君。」

「ゴキブリ君、おはようございます。」

ゴキブリ君は、略さずに言ったので普通に話しかけられる。

蛙は、ゴキブリにグレープパイを投げようとしていた。

おはようキリギリス君（後書き）

次回 退け！洗脳蜘蛛野郎！。お楽しみに

退け！洗脳蜘蛛野郎！（前書き）

この物語に緊急事態発生？

退け！洗脳蜘蛛野郎！

ゴキブリと蛙君は、楽しそうに外を散歩していた。

「想像するだけで、砂糖が物体に変身するんだからな。」

そこに蜘蛛がやってきた。

「やっぱり、君達の恨みをかじりなされ・・・」

ゴキブリと蛙は、突然喧嘩をし始めた。

蜘蛛は、其れを見て笑っていた。

ゴキブリと蛙は、洗脳が解けて、イライラしていた。

「なんだよ！そんなに俺を見て・・・」

ゴキブリと蛙は、蜘蛛を川に流した。

「助けてくれー！」

ゴキブリと蛙は、蜘蛛からとった催眠術を使って、川を無くした。

「これは、もしかして凄いアイテムをゲットしちまったのか？」

砂糖の世界を書き換えることができる時計を蛙とゴキブリは、入手してしまっただようだ。

退け！洗脳蜘蛛野郎！（後書き）

次回 丸。お楽しみに

丸（前書き）

不思議な丸が妖しくしたりする。

丸

ゴキブリと蛙は、いつものようにダラダラしていた。

「ねえ、今日は、暇だから外へ出て何かしないか。」

「ああ、そうしようか。」

ゴキブリと蛙は、外でテニスをして楽しんでいた。

「30 - 15だから、次は、勝てるぞ。」

「この小説を見ているみんな、ゴキブリは俺に50連敗しているんだよ。」

蛙は、テニスしている時、何かを見つけた。

「タイム、丸い奴を見つけた。」

「丸い奴？何だろう。」

蛙とゴキブリは、丸い奴を見ていた。

その丸は、悪ふざけができていた。

「ただの丸か。」

蛙は、丸を投げた。

シロアリに丸が当たり、シロアリは、姿がミジンコになってしまっ
た。

丸（後書き）

次回、ゴキブリは何をしているの（1）。お楽しみに

ロキブリは何をしているの(1) (前書き)

3話完結型のお話です。どれも短いですよ。

ゴキブリは何をしているの(1)

蛙は、寝られなかった。

「おはよう、蛙君。」

「ふああああ、おはようゴキブリ君。」

二人は、朝食を食べていた。

「昨日、何かしてた？」

「何もしてないけど。」

「音がしてたからさ。」

「音なんてしてないよ。君の耳が少しおかしくなったかもしれないよ。」

「でも、1週間もだよ変だよ。やっぱり何か作っているんだな。」

「だから変じゃないってば。」

ゴキブリの言った言葉に疑問を持った蛙だが、後は気にしないことにした。

再び夜がやってきた。

ゴキブリは何をしているの(1) (後書き)

次回 ゴキブリは何をしているの(2)。お楽しみに！

ゴキブリは何をしているの(2)

再び夜がやってきた。

またしても、変な音がしていた。

「くそ、蛙の奴、なにをやっているんだよ!」

イライラ気味の蛙は、いつの間にか不眠症になりかけていた。

翌朝

ゴキブリと蛙は朝食をとっていた。

「本当に何か作っているの?」

「作っているよ。でも教えな—い」

「なんだか、むかつく奴だぜ。」

「なんか言った?」

「別に。」

蛙は、イライラしながらも夜になれと思っていた。

「何を作っているか教えてあげよ。」

「本当か!じゃ見せてよ。」

ゴキブリは何をしているの(2) (後書き)

次回 ゴキブリは何をしているの(3)。お楽しみに

ゴキブリは何を作っているの(3)(前書き)

ついにカミングアウト。

ゴキブリは何を作っているの(3)

ゴキブリは、不眠症になりかけてきた蛙のために、カミングアウトすることにした。

蛙は、ある意味楽しそうな気分になった。

ブルーシートで覆い隠されている物体を蛙は、嬉しそうな感じで見ている。

ゴキブリが蛙に言った。

「僕と君が、出会ってから半年になるから記念に作ったんだ。行くよ！」

ゴキブリが作っていたのは、蛙とゴキブリがこの世界を楽しく冒険している像であった。

しかし、一つだけ変な顔をしている蛙であった。

「何だこれは……」

「お前と半年も一緒になってたら、お前の顔が、余計に俺の顔になってウザいんだよ！」

まさに外道

蛙も言い返した。

「とうより、半年じゃねえだろ！頭を洗って出直して来な！」

まさにも外道返し

まさにも外道が、何度も続いて月が呆れてお日様が昇った。

ゴキブリは何を作っているの(3) (後書き)

次回 厳密に語ると・・・。お楽しみに！ここでまさかの「まさに外道」が出てきてしまいました。ネタがねえからしょうがねえだろ
うが！by台風X号

厳密に話ると・・・

蛙は、スコップで穴を作っていた。

「なにしているんだい。蛙君？」

「ゴキブリか。ちょっと手伝って。」

「え、なになに。」

ゴキブリはスコップを持たされた。

「まさか、落とし穴を作ろうなんて。」

「落とし穴ではない。驚くべき発見なんだ。」

「蛙君、なにかこの世界の秘密を知っちゃったということか。」

「そついうことだよ。」

きつぱりという蛙君にゴキブリは少しあきれた。

そしてこつんという音がした。

ゴキブリは変な砂糖を見つけた。

この世界から脱出できるらしいが・・・

一体、此の砂糖はなぜここに埋められていたのだろうか？

厳密に語ると・・・(後書き)

次回 シロアリ大戦争。お楽しみに！

シロアリ大戦争

砂糖の世界に異変が起こり始めていた。

東のシロアリと西のシロアリが対立関係になってしまったのである。

「蛙、外が騒がしいぞ。」

「分かっているさ。」

「分かっているさって。俺達も巻き込まれるのかもしれないぞ。」

その時、その二人の家にミサイルが被弾した。

「ほら。言わんこっちゃない！」

「うるせえ、というより逃げたほうがいいな。」

二人は必死に走って逃げた。

そして・・・

ごんっという音がした。

「ゴキブリ大丈夫か？」

「痛って、瓶の中だ。でも脱出のしかたがわからない。」

蛙は、謎の砂糖のことを思い出した。

シロアリ大戦争（後書き）

次回 最終回 脱出と謎の奇跡。お楽しみに！

最終回 脱出と謎の奇跡

瓶の中の世界でどう逃げようかと戸惑う蛙とゴキブリ。

「蛙君、謎の砂糖持っているだろ？」

「ああ持っているけど・・・」

「何かに使えないのかな？」

蛙は、謎の砂糖を一粒こぼしてみた。

瓶が割れた。

「何だ？」

「あいつらがこの世界を壊したんだ！」

「よし、捕まえて殺してやれ！」

「オオー！」

シロアリ達は、蛙とゴキブリに近付いた。

「まずいよ。」

謎の砂糖を蛙とゴキブリは思わず飲んでしまった。

体が巨大化した。

「うわぁああああ！」

あれから2時間後

「蛙君、蛙君。」

「ゴキブリ、どこ行ったんだ？」

謎の奇跡それは、それぞれの世界に飛び立っていたのである。

完結

「って終わりがよー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3516n/>

SUGAR BREAK

2011年8月6日17時25分発行